

[令和4年度] 第4回 飯田市新文化会館整備検討委員会 会議録

会議名称	第4回 飯田市新文化会館整備検討委員会
開催日時	令和4年11月25日(金)午後7時～午後9時18分
開催場所	飯田文化会館 人形劇場
出席委員(敬称略)	片桐啓、上沼俊彦、川崎好昭、塩澤哲夫、高松和子、黒河内智子、賜正俊、桑原利彦、小西盛登、小木曾俊夫、遠山あづみ、前澤正徳、森本典子、小澤櫻作、佐々木宏幸、山元浩
欠席委員(敬称略)	田中悦雄、原田雅弘、飯島剛
オブザーバー (敬称略)	井坪隆
出席事務局職員	佐藤市長、熊谷教育長、松下参与(教育次長事務取扱)、下井文化会館長、筒井補佐兼文化会館建設担当専門主査、木村事業係長、白井主査、中島会計年度職員、澁谷主事見習、山崎人形劇のまちづくり係長、田中主査、宮澤主査
会議の概要	<p>1 開会</p> <p>2 議事</p> <p>(1) 前回の振り返り(配布資料No.1)、今後の進め方(配布資料No.2)</p> <p>(2) 学習会</p> <p>①基調講演</p> <p>○テーマ：全国事例から見えてくる新しい時代の地域の公共劇場の姿</p> <p>○講師： 公益社団法人 全国公立文化施設協会 アドバイザー 草加 叔也 氏 (劇場計画コンサルタント/空間創造研究所 取締役/ 岡山芸術創造劇場長)</p> <p>②パネルディスカッション [特別対談]</p> <p>○テーマ：リニア時代の飯田にふさわしい「新飯田文化会館のあり方」</p> <p>○コーディネーター(進行)： 佐々木 宏幸 学識委員 (明治大学 教授/博士/一級建築士/米国公認都市計画家)</p> <p>○対談者： 草加 叔也 講師 小澤 櫻作 学識委員 (上田市交流文化芸術センター[サントミュージゼ] プロデューサー)</p> <p>山元 浩 学識委員 (名古屋フィルハーモニー交響楽団 演奏事業部長)</p> <p>塩澤 哲夫 整備検討委員長</p> <p>3 事務連絡</p> <p>4 閉会</p>

※公表の会議録(発言)には委員の氏名を掲載いたしません。(学習会は掲載)

1 開 会

○委員長 皆さんこんばんは。

定刻となりましたので、ただいまから第4回新文化会館整備検討委員会を開催いたします。
本日、飯島委員、田中委員、原田委員から欠席のご連絡がありました。ご報告させていただきます。

今回の委員会は、コロナ対策を行いながらも、一定数の傍聴を可能とするために、こちらの人形劇場で開催することにいたしました。

さて、前回までは、ワークショップなどの手法も使って、新しい文化会館の柱となる基本理念を検討してまいりました。今後は、基本理念の考えをよりどころにしながら、基本構想の検討へということで進んでいくこととなります。

そこでこれまでの検討の過程でも、検討委員の皆さんから「リニア開通後の飯田の新しい文化会館の位置づけに関してどのように考えていくのがいいのか」とか、「ほかの都市や全国の先進事例を参考にしたい」などの意見もありましたので、今回は公共ホールの専門家をお招きした学習会を中心に、基調講演と特別対談を企画いたしました。そういった趣旨でこの会場となっておりますのでご了承ください。

市長あいさつ

○委員長 では、本日、佐藤市長が出席されておりますので、一言ごあいさつをいただきたいと思っております。

佐藤市長、お願いします。

○佐藤市長 皆様、こんばんは。

本日は、第4回の新文化会館整備検討委員会ということでお集まりをいただきました。委員の皆様方には、本当にこれまでの基本理念の議論につきまして、本当にそれぞれのお立場からご意見を賜りまして、本当にありがとうございました。

私も過去3回の議事録をつぶさに読ませていただきましたけれども、どの委員のご発言も大変示唆に富み、また、それぞれ本当に傾聴に値するご意見、ご発言が重ねられておりまして、本当に委員の皆様方のこれまでの本当に真摯なご議論に感謝を申し上げたいと思います。

いよいよこれから基本構想を検討していくというステップに進んでいくわけですが、本日は全国の公共劇場、公共施設の事情に詳しい草加叔也先生をお招きして、基本構想をお伺いし、また、その後に学識委員の皆様方による対談ということで、先ほど委員長からお話があった、リニア時代の新文化会館のあり方というのはどういうふうと考えていったらいいのか、そういう今後の議論につながる対談をしていただくということでもあります。

今日は傍聴席を設けまして、市議会議員の皆様にもお聞きいただくわけですが、本当に今、私もいろいろな会合や市民の皆さんとお会いする機会に「一体どこにできるんだ」という話を盛んに聞かれるんですけども、「その前にどういう文化会館のあり方なのか

というところを今、議論しているんですよ」というこの話をさせていただいているわけですが、そのときの議論の中でやはりこの 10 万人の都市、あるいはこれからリニアが通るこの飯田下伊那というところに文化会館がどういうふうにあるのがいいのか、そういった今後の検討、基本構想の検討に当たって、今日は本当に参考になる話をお聞きできるというふうに思っていますので、私自身も勉強をさせていただきたいと思ひますし、議員の皆さんともその情報を共有できる本当に貴重な機会に今日はなると思ひますので、草加先生をはじめ、今日ご登壇いただく皆様方には本当にありがたいと思ひますので、ぜひ我々の今後の検討に資する有意義な話合いを聞かせていただきますようお願いしたいと思ひます。

今日はどうぞよろしくお願ひをいたします。

(拍手)

○委員長 佐藤市長ありがとうございました。

2 議 事

○委員長 それでは早速ですが議事に入ります。

(1) 前回の振り返り・今後の進め方

○委員長 初めに(1)前回の振り返り・今後の進め方について、事務局から説明をお願いします。

○松下参与 検討委員会事務局の教育委員会の松下でございますが、私のほうから今日、お配りをした資料に基づいて前回までの振り返りをさせていただきたいと思ひます。

説明に入ります前に受付のほうで資料を配らせていただきましたけれども、3種類の資料をお配りしました。1つは、次第の一番厚い資料ですけれども、これとあとアンケート用の報告様式ということで配布させていただき、さらに都度、この検討委員会の経過についてはニュースレターという形でまとめて、広く市民の皆様にご報告させていただきますので、最新の2回目のニュースレターでありますけれども、それをお配りしております。もし配布漏れがございましたら、またお申し出をいただければと思ひます。

それでは、前回の振り返りということで、資料No1、ここを中心にご覧をいただきたいというふうに思ひます。

これまでの整備検討委員会の今までの経過でありますけれども、第1回目は新文化会館をどのような施設にしていくかということの一番の基となる議論として、飯田の文化とはということテーマに小グループで分かれていただいて意見交換をいただきました。

また、第2回では、飯田文化会館の果たしてきた役割とこれから果たす役割ということで、これも班に分かれて意見交換を行っていただきまして、また、学識委員の先生方やオブザーバーの方にもご助言をいただいて、これを基に1ページの資料1のところにありますように、30個のキーワードを体系的に整理させていただいております。

前回の第3回の委員会では、整理した30個のキーワードを基にして、検討素案として事

事務局のほうから、例えばということで「みんなが集い、創り、伝え、(共に)感動する『飯田文化芸術ひろば』」という仮の設定の基本理念の素案について検討をいただきました。この中では、いくつかの検討ポイントとしてご意見をいただきましたけれども、まず「みんな」という言葉、また「集う」、「創る」、「伝える」、「感動する」という4つのキーワード、また、「飯田」という独自性を表現する言葉、「ひろば」という社会的空間的な概念について、まず全委員の皆さんからご意見をお伺いした後に、全体でも意見交換をして、ここの先ほど申し上げたようなポイントについて多くご意見をいただきました。

主なご意見として、「このような形で分かりやすい言葉が並ぶというのは非常にいいのではないか」というようなご意見、また、「まちの未来像が入っていくともう少し奥行きのある深い理念になってくるのではないか」というようなご意見、さらに「『飯田』や『文化芸術』という言葉は、これは極々当たり前のことであるから、改めて基本理念の中になくてもいいのではないか」というようなご意見。さらには、「基本理念の案は、基本構想の議論に入ってしまったときよりどころとなるというものであるため、今後も独自性を考えていくために現時点ではむしろ『飯田』というのを意識するために残しておいたほうがいいのではないか」というような意見が出ました。さらに、今日、前回のまとめにもつながっていくわけですが、「今の段階でフレーズを無理に固めるということではなくして、今後の基本構想の議論のよりどころとするワードとして仮置きをしておいて、今後の基本構想の協議の中で一定の機が熟した段階で最終的にまとめていくというやり方もあるのではないか」というようなご意見もいただきました。

以上のような前回の意見交換の経緯を尊重させていただいて、これは委員長さんともその後、お話ししましたが、前回までの基本的な押さえとすると、先ほどのご意見のとおり、現時点で最終形を決定することではなくて、これはあくまでも意見交換で出された30のキーワード、これを尊重して、仮のものとして設定をしておいて、これをこれからの基本構想を考えていく上でのよりどころとしていくこと。さらに最終形については、基本構想の検討結果の中で一定の段階で決定をしていく、方向付けをしていくということできたいということで事務局としてはご提案を申し上げたいというふうに思います。

また、現時点での基本理念の仮置きとして、前回の事務局案からいただいた意見で修正を若干加えておまして、これについては「みんなが集い、創り、伝える、感動の飯田ひろば」、これを仮置きの基本理念として、今後の検討材料として「みんな」もしくは「だれもが」という言葉、「共に」という言葉、「感動を味わう」という表現、「私たち」の「ひろば」という考え方、こんな点をこれからの話合いのポイントであるということ、この時点では共有いただきたいというふうに思います。

続いて、今後の進め方について、資料No2ということで、説明をさせていただきます。

本日の第4回でありますけれども、新しい文化会館の基本構想の議論に向けての学習会という形で、今日は公開という形で実施をさせていただいておりますけれども、その後、次回

の第5回以降については、基本構想についてのご検討をいただきたいというふうに考えております。そこで検討いただく基本構想の捉えでありますけれども、これについては先ほど仮置きをした基本理念を実現していくための方針や方向性や事業の考え方やそういう大きなところを、ご意見をいただきながら整理をいただきたいということでもあります。基本構想の後には、今度は基本計画というものをつくる作業をお願いしたいと思っておりますけれども、こちらの基本計画については、より具体的な施設規模や設備を含めた機能、概算事業費や事業スケジュールみたいな具体的な計画といったものになります。基本構想はちょっと繰り返しになりますけれども、基本理念を基にした事業のあり方、施設整備の方向性、こういった大きな考え方をまとめていただき、まだその段階で引き続きご意見をいただくということをお願いしたいというふうに思います。

後ほど今日の第4回の開催趣旨等は、改めて説明をさせていただきますけれども、前回までの振り返りと次回以降の進め方について説明をさせていただきました。

よろしくお願いいいたします。

○委員長 たいま（1）について説明がありましたけれども、委員の皆様からご質問等ありましたらご発言をいただきたいと思っております。

発言される場合には、お手数ですが挙手をしていただきお名前をおっしゃっていただいたら着座のままご発言いただくようお願いいたします。

何か質疑等ございますか。よろしいですか。

（発言する者なし）

○委員長 特にありませんでしたので、ありがとうございました。

（2）学習会

①基調講演

○委員長 続いて（2）学習会に移ります。

改めて学習会の趣旨を事務局から説明いたします。お願いします。

○松下参与 それでは続いて、私のほうから本日の学習会の趣旨についてご説明をしたいというふうに思います。

もう既に委員長さんの冒頭のごあいさつ等、市長のほうからも目的、あらまし等については説明をしております。繰り返しになる部分がありますけれども、ご容赦いただきというふうに思います。

本日の学習会については、草加先生の基調講演と有識者の先生方、そして委員長さんによる特別対談の2部構成で計画をさせていただきました。

この学習会の目的でありますけれども、これはリニア時代におけるふさわしい新文化会館のあり方を考えるということで設定をさせていただいております。

新文化会館の整備・開館の時期については、これは飯田市の長期財政見通しの中ではリニ

ア中央新幹線の開業から間もない時期ということで、今のところは予定をさせていただいていますが、これまでの検討会のワークショップの中でも「リニア開通後の大きな状況変化を見据えて、新文化会館の役割を考える必要がある」というご意見を多々いただいております。

リニアが開通しますと、当地域は品川まで最短 45 分、あとは名古屋までは最短 25 分というように首都圏・中京圏との巨大都市圏との時間的距離が劇的に短縮化されるというような状況変化が起きますけれども、このことによってリニア時代には当地域から舞台芸術活動を創造発信する上での環境変化も当然起きるわけでありましてけれども、同時に都市部には規模が大きく機能も性能も高い文化ホールがひしめきあって激烈な興行立地合戦、また観客の獲得競争が行われていますけれども、このようなハイグレードなホールで多様な舞台芸術について日帰りでも鑑賞できるような、そういう鑑賞関係でも大きく変わってくるというような状況変化が予想されます。

こうしたリニア時代の大きな環境変化を見据えたときに、新文化会館はどのような機能を重視した施設であるべきなのか。現在の飯田文化会館の大きな特色でもある地域における舞台芸術活動の創造発信の場であるという機能等、もう 1 つ都市部からの観客も想定しながら、プロの舞台芸術活動も鑑賞をできる場であるという、2 つの議論があるとする、そのウェイトバランスをどんなふうにして考えていったら良いのか。また、時間距離からすれば、大都市に含まれてしまうような環境変化が起こるわけですが、その中でナンバーワンを目指すのか、あるいはオンリーワンを目指していくのか。さらにナンバーワンを目指す場合も、オンリーワンを目指す場合にも、何をもってそれを飯田市の特色としていくのかという辺りがこれからの基本構想づくりの一つの重要な視点になってくると思います。

こうした点を踏まえまして、新文化会館の整備基本構想の検討に入ろうとしている、あるいは都市と地方を含めた舞台芸術ホール施設の現状や課題について、知見をお持ちである有識者の方々からのお話をいただきながら考え合う、そういう機会とさせていただいたというふうに思います。

若干長くなりましたけれども、そういった意味で今日の学習会というのをこれからの検討の重要な軸を考えていく上での学習会ということで、また整備検討委員の皆さんには忌憚ないところで今日のお話を基にご意見をいただき、基本構想の中ではその軸を定めながら計画づくりを進めていければと考えております。

趣旨の説明については以上でございます。

○委員長 ありがとうございます。

それでは早速、学習会の前半ということで進めたいと思います。

学習会前半は基調講演となります。講師のご紹介を副委員長から申し上げます。

○副委員長 皆様、こんばんは。

それでは、基調講演の講師、草加叔也先生をご紹介させていただきますので、先生、どう

ぞご登壇のほうお願いいたします。

すみません、私も寄る年なんで、老眼がどんどんきつくなってしまっていて、皆さんの顔はすごくはっきり見えるようになっておるんですが、近いものが見えにくくなったもので、老眼鏡で失礼させていただきます。

それでは本日の基調講演をお願いする草加叔也先生をご紹介します。

先生は、岡山県倉敷市生まれでいらっしゃいます。劇場・音楽堂等、演出空間を中心に基本構想から施設管理計画、管理運営計画など劇場計画コンサルタントとして活躍されております。

これまでに新潟市民芸術文化会館、長久手市文化の家、可児市文化創造センター、国立劇場おきなわ、兵庫県立芸術文化センターなど、各地の劇場づくりに関わられてこられました。また、確か今年亡くなられたんですかね、ピーター・ブルックさん、世界的な演出家で映画監督であったピーター・ブルックさん、それから既にやっぱり鬼籍に入られているコンテンポラリーダンサーのピナ・バウシュさんなどの演出作品の日本公演で、技術監督として直接上演活動に携わってこられました。1989年には、芸術家在外研修員として渡英、イギリスのほうに渡っていらっしゃいます。来年、岡山市に新しくオープンする岡山芸術総合劇場の劇場長に就任されており、オープン前からのアウトリーチ活動の指揮も執られていらっしゃいます。ほかにも公益財団法人千葉県文化振興財団理事、東京芸術文化評議会専門委員会委員、東京文化会館運営委員などの要職を務めていらっしゃいます。

以上、草加先生をご紹介します。

それでは草加先生、よろしく願いいたします。

(拍手)

○草加講師 お招きをいただきましてありがとうございます。草加と申します。

今、ご紹介いただきましたように、劇場計画のコンサルタントとしても何年でしょう、40年近く仕事をしてまいりました。残念ながら長野であまり仕事をさせていただいた記憶はないんですけども、今日は皆さんの少しでもお役に立てるようなお話ができればと思ってまいりました。

今日、映しますスライドは、全て皆さんのお手元に配ってありますので、それを見ながらお話をさせていただければと思います。

この後、座ってお話をさせていただきたいと思います。

まず1枚目のスライドから始めたいと思います。これは各年度に少し古い資料になりますが、10年ぐらい前の平成24年までしか載っておりませんが、各年度にできた公立文化施設の数を縦軸にプロットしました。不思議ですよ。1年間に112館ホールが開館した年があるんです。1年間、全国にですよ。そんな年がある。これはもうバブルの頂点と言われる年ですけども、それからバブルが弾けて急激に施設の整備数が減ってきました。全部合わせるとこれ約2,200館ぐらいあります。その中で最近だと年に10館ぐらいしかオープンして

ないというのが現状です。

ただし、2,200 調べては、これは公立文化施設協会の調べで、これはまた地域創造が調べますと 3,600 くらいという数字が出てくるんです。その差は何かというと、地域創造が調べると図書館に附属しているホールだとか美術館に附属しているホール、そういうものもホールの一部としてカウントをするので、ちょっとその数が変わってくるというふうに思っていたいただければいいかなあと思います。

まず飯田文化会館ができたのが 1972 年、それと人形劇場ができたのは 1988 年。飯田文化会館は 50 年たっています。

それとですね。一番重要なのは、ここに 2,200 ホールがあるというふうに言いましたが、今、地方自治体の数は全国でいくつあるかご存じでしょうか。私どもが学生時代に、地方自治体の数っていうのは、全国で 3,300 あると教えられてきたんです。今、なんと 1,750、分母が変わったんですね。平成の大合併で 1,750 自治体ぐらいしかないんです。その中に 2,200 のホールがある。ということは自治体 1 個に 1 個以上のホールがあるっていうのが今の現状です。昔は 3,300 分の 2,200 だったので、我々劇場コンサルタントという仕事はまだあと 1,100 か所くらいあると、私が死ぬまで仕事があるなあと思ってたんですけども、それが突然分母が変わってしまったので 1,750 分の 2,200、もう造ることはないだろうと思っておりました。ただ、建物というのは飯田もそうですけれども、老朽化をしていくんです。今、新しい新規のホールを造るっていう事例は全国ありません。ほとんどが建替えです。50 年、60 年たったから建替えているというのが現状だというふうに思っていたいただければいいと思います。

私ども、私が劇場長、簡単に言うと館長なんですけれども、務めておる岡山芸術総合劇場というのは、岡山市民会館と岡山市民文化ホール、この 2 つを再編整備して新しい劇場を造るということで、2 つを 1 つにしていくという計画です。ですので、新しい施設を造っているわけではなく、今までの伝統を引き継いで新しい施設を造っていかうというのが今の現状だと思っていただければ良いと思います。

そんな現状にあるという前提で見ていただく。次のグラフは、最近ここ 10 年くらいの公立文化施設の充足数をグラフで全国の数プロットしたものです。見ていただくと 2,200 くらいあるなあとというのが分かっていただけのだろうというふうに思います。この 2,200 の数っていうのは、さっき言いましたけれども、全国の映画館のスクリーン数より多いんです。で、これは施設数ですから、例えばここであればホールが 2 つありますよね。ということ数を数えていくと、ホール数っていうのはこの数倍、2,200 の 2 倍以上はあるだろうというふうに言われています。さっき言いましたように、これも全国公立文化施設協会の調べですので、若干地域創造の調べなんかと差があるというふうに思ってください。

これが全国の数正確にプロットしたものです。赤く塗ってあるのは、その県で一番数が多かったときを示しています。小さいですけども、長野県のところを赤枠で示しました。

これですね。大体今、54 施設、県内にあります。ほかの都道府県を見ていただくと、例えばですけども、岡山を見てみましょうか。岡山をずっといくと上から 3 番目、51 施設ぐらいあります。ただし、島根県には 38、鳥取県には 16 ぐらいしかありません。都道府県によって公立文化施設の数はかなり差があるというふうに思っただけならばいいと思います。でも、54 施設っていうのは県で比べると多いほうだというふうに思われます。それが現状です。

次に見ていただこうと思うスライドですけども、これは戦後それぞれの施設がどんな役割を担ってきたかっていうその変遷を含めて書きました。実は、1945 年悲しいですけども終戦という年がありました。それ以前には、全国には芝居小屋というものだとか、歌舞伎小屋みたいなものがあります。歌舞伎小屋っていうのは、座付き作家がいて、そこで座付きの役者がいて、そこで興行がやられてた。これはいわゆる海外の劇場と同じで、そこにはプロダクションがちゃんとあったんですよ。ところが、戦後になって造られた施設は、いわゆるどちらかというと貸し館中心の劇場になった。そこには座付き作家がいるわけでも、そこには役者がいるわけでも、ダンサーがいるわけでもないという施設に変わっていきます。

その大きなきっかけになったのが戦後、残った施設で復興のいろんな活動を始めたのは、公会堂という施設が戦後の残った施設の中では使われ始めるんですけども、そこで芸能だとか演芸だとかが行われるようになります。それが徐々に高度経済成長期になってきて、その中でやっぱり演劇をやるんだったら緞帳（どんちょう）があったほうがいいだろうとか、照明があったほうがいいじゃないとか、公会堂ですから何もなかったわけですよ。そこには演台があってお話をするだけ。体育館のような施設だと思っただけならばいいと思います。

そこに舞台照明があったほうがいい。それから緞帳があったほうがいい。袖が見えないように袖幕があったほうがいい。だんだんと機能を追加していくのが公会堂から劇場型のホールへ変遷するような時期があります。

今でも、名古屋市公会堂というのが、昔の公会堂の面影をよく残しているんですけども、あそこよく見るとオーケストラピットがあった跡があります。それから後ろの壁が水平壁、これは正確に劇場の呼び方をするとレント水平壁という形をしていて、夜景だとか空が綺麗に映るような漆喰の壁でできているんですね。そんな壁が公会堂には必要ないはずなんです。ところが、そこで舞台芸術をやるというためにそういうものを造ってきた時代があります。

ですから、名古屋市公会堂っていうのは、いわゆる集会場としての公会堂から劇場型へ変化している、そのストーリーをよく残している公会堂なんですね。さらにそれにいろんな機能を追加していこうということで、劇場が多目的化をしていきます。その少したったぐらいのときに 1972 年に飯田文化会館は造られている劇場です。

どうして多目的化が起こっていくかっていうと、一つの器の中でオーケストラもやりたい、室内楽も聴きたい、コーラスも、邦楽も、吹奏楽も、オペラも、バレエも、ミュージカルも、

演劇も、歌舞伎も観たいというような要求が増えていく。誰が考えても、一つの四角い器の中に三角形のものとか丸いものとか、まあ3つぐらいは入るかもしれないけど、そこに10個の形が違うものを押し込もうとすると、だんだん一つずつの形がいびつになる。変形をしていく。で、無理やり入れていくと、なんだか分からないけれども、多目的ホールというよりも、どうでしょう、いろいろなものを突っ込むことによって、変形をしていく、一つずつがちょっとこれは無理があるんじゃないかっていうようなものになってしまう。それで多目的ホールが無目的ホールだというふうに揶揄された時代があります。

ただし、今も多目的ホールっていうのは造り続けられています。私どもの岡山芸術総合劇場の中ホールも音響反射板を持った多目的ホールです。ただし、大劇場は音響反射板を持ってないんですね。その話は後でしますが、そういう多目的ホールの中でも重心を持った多目的ホールを造るということは、最近ではよくやられています。

兵庫の佐渡 裕さんが芸術監督をやっている兵庫の大劇場も、可動型の音響反射板を持った多目的な機能を持っているホールです。でも、重心を持った多機能ホールとしてやられています。オペラだとか、それから大型の演劇だとか、そういうものには向いている。ただし、歌舞伎にはそんなには向いてませんよっていうことを割り切って造ると、重心を持った多機能ホールっていうのは今でも十分高い性能のホールを造ることができます。兵庫の芸術劇場の音響がいい、悪いっていう評価はあるかもしれませんが、同じようにびわ湖ホールもそういう可動型の音響反射板を持ったホールとして整備をされているというふうに思っただけであればいいと思います。

ただし、1980年くらいになってくると、専用ホールというのを造ろうという動きができます。それは音楽をやっている人にとっては、可動型の音響反射板では十分音を反射しないから専用ホールを造ってほしいという要望があり、演劇をやっている人からもうなんで主舞台の上に音響反射板を格納するんだと。こんな邪魔なものがあるから大道具を吊りたいところで大道具を吊れないじゃないかっていうような要望が出てくる。

そんな中で、もうそれだったら専用ホールを造っていこうという動き。一番最初に造られたのはやはり音楽ホールですね。音楽のための専用ホールが造られるようになり始めます。今ではオペラ、バレエ、そういうものに対する専用ホールも造られるようになりますが、最初は音楽ホールが専用ホール化を始めます。

ただ、その動きに呼応してさらに1990年くらいになると、創造型の施設、創造発信型の施設を造っていこうという動きも生まれ始めます。これは、ハードが変わったわけではなくて、どちらかというところこの活動が充実し始める劇場です。ここにも書きましたが、水戸芸術館、それから彩の国さいたま芸術劇場。彩の国さいたま芸術劇場は、先般亡くなられた蜷川幸雄さんが芸術監督を長年務められた劇場です。

そういう施設ができ始めると、そこで作った作品を全国に回していこうと。観ていただこうと、この劇場だけではなくて、いろんなところで観ていただこうというような動きが始ま

る。長野県内では、まつもと市民芸術館なんかがその一つの代表のホールだと思います。作った作品をその劇場から発信していく。もちろんたくさん作品を松本でも観ることができますけれども、そこからも発信していく。

創造発信型の劇場っていうのは、アンテナでいうと受信アンテナではなくて、発信アンテナを持っている劇場として整備をしていこうという考え方です。ですので、ホールとしてはあまり大きな差はないかもしれないけど、それを作るための練習室だとか、それから工房だとか、そういうインフラを備えるっていうことが発信型の劇場にとっては大変重要な要素になります。演劇を作る、音楽を作るためには、ホールだけじゃ十分じゃないんです。練習するための施設、それから大道具を作るための施設、そういうものも充足させていくことによって、初めて創造発信型の施設になっていくというふうに思っていたらいいと思います。

ただ、創造発信型の施設っていうのはそんなに多くマジョリティになっているわけではないです。この絵では若干真ん中の多目的ホール・多機能ホールが少なくなっている印象を受けるかもしれませんが、一番多いのは多機能ホールを今でも造っていこうという流れです。ただし、その中で2番目に専用ホール、あるいは3番目に創造発信型の施設を造っていこうという流れも今生まれつつあるというふうに思っていたらいいと思います。

で、これまで公立劇場・音楽堂が担う役割を少し文字で整理をしてみました。少し極端な書き方をしているかもしれませんが、30年前までは地方自治体っていうのはホールを造る、完成すればそれでゴールだというふうに思っていたかもしれません。つまり優れた機能を備えた劇場・音楽堂を整備し、その施設を地域の市民に利用する機会を平等・均等に提供するのが行政の役割だと思っていたように思います。つまり、できた後は使っていたらいいんだと。市民との親和性はそれほど高くない、使える人が使ってほしい。使えることに対して低廉化に使っていただくというふうに思っていた。行政にとっては、ホールが完成するとその日がゴールだったんです。

ただ、今、これからの施設っていうのは文化を発信していこうという施設は、施設が完成したとき、そこがスタートなんですね。そこから文化をつくっていくので、竣工をゴールとみるかスタートとみるか大きく違いが出てきます。

10年くらい前までは、それじゃ駄目だろうと。使い捨てとしては。ということは新しい施設が隣町にできたらみんなそっちへ行っちゃうよと。もう1個できる。そしたらまた新しいほうにみんな行っちゃうよというような事態が起こり始めてくると、やっぱりうちの劇場でものを観ていただくためには、いろんな優れた作品を招聘してきて、観る機会を提供していこうというのが行政のスタンスが変わり始めたところです。利用促進を働きかけ、優れた施設を利用促進するとともに、優れた音楽芸術や舞台芸術を自ら招聘することで、鑑賞機会を増やしていくということが公立文化施設では行われてきました。芸術文化に触れる機会を増やすことへのアプローチが始まったというふうに思います。

それから10年ぐらい前からは、さらにもっと積極的になって、文化芸術を市の成長戦略としていこうというような考え方も生まれ始めます。全てではありませんけれども、これまで音楽芸術の魅力に触れたことのない市民や舞台芸術の楽しさを知らない市民を振り向かせる事業を実践していく。未開拓の市民を耕す、芸術文化に振り向かせるということが始まります。そのためには、積極的にこの公立文化施設ってというのがそのことをやっていかないと誰も振り向かないですね。いいものやっても観に来てくれる人がいないと何の価値もない。ぜひ観に来ていただくように仕掛けていこうというのが、今の新しい芸術文化施設の考え方です。

後でお話をしますが、私ども岡山芸術総合劇場も「つくる」ということを大きなテーマにしています。つくるっていうのはいろんな字があります。創造の「創」、それからにんべんの「作る」、しんじょうの「造る」、いろんな「つくる」という字があるんですけども、その中で私どもは作品を「つくる」ことも1つのミッションにしています。ただし、そのことで観客を「つくりたい」と思っています。それからまちを「つくる」、賑わいを「つくっていききたい」と思っています。

そういうことで、作品を「つくる」だけじゃなくて、その効果を波及させていく、その仕掛け、それからハブになることが我々の劇場の大きな役割だと思っています。もちろんアーティストもつくりたいと思っていますけれども、その前に、うちの劇場をサステイナブルにしていくためには、私もいい歳なんでもうこの先20年も館長やっていることは絶対ない。ということは、次の世代を担う劇場人をつくっていくっていうのも大きな役割です。それから最終的にはやっぱりアーティストもつくりたい。その総合力として、まちの賑わいをつくっていききたい。劇場ができることはそういうことだというふうに思っています。

劇場をつくるためのフロー、今、皆さんがどこにいらっしゃるかっていうと、基本構想をつくられています。この次には基本計画をつくるというお話を先ほどお伺いしました。それが終わると、きっとその下にある設計だとか施工だとかっていうフローに一旦移っていきます。

私も実は建築の出身なんですね。一級建築士という資格を持っているんですけども、それでなんで劇場の関係者なのかっていう、私は建築をやっていたんですよ。とても舞台芸術が好きで、18まで岡山の片田舎にいましたんで、舞台も観たことがないし、岡山はご存じの方いらっしゃると思いますけど、木下サーカスの本社があるまちなんですね。ですからサーカスは観たことがある。ただし、演劇もオペラもほとんど観たことがありませんでした。でも大学に行って、「牛に引かれて善光寺参り」という言葉があるように、だんだん好きになって、それで建築をやっているんですけど、その中でも劇場がとても好きになりました。劇場に関わる仕事がしたいと思って、先ほどご紹介をいただいたように、ピーター・ブルックだとかピナ・バウシュの技術監督をさせていただくような機会があって、それが劇場にだんだんと吸い込まれていく。人生幸せのほうに行っているかどうかよく分からないんですけども、とても楽しい仕事をやらせていただいているというふうに思います。

ということで、話はちょっとずれましたが、この基本計画をつくると、設計者選定、あるいは施工者選定というフローに移っていきます。ただし、平行して管理運営計画、これをどうやって運営していくのかという計画をつくらなければいけません。行政はそれができると施設設置条例、これは公の施設っていうのを造るとこの施設設置条例を定めなきゃいかん。それを定めて管理運営者を決定していく、直営ですか、指定管理かというのがこの日本の公立文化施設のルールなので、どちらかを決めていく。その後に開館までの間にちょっと加速度をつけるということから、やっぱりプレ事業をやっていく。それから開館を迎える。先ほど言いましたように、開館は今の公立文化施設はゴールではなく、我々はここがスタートだと思っています。

それから施工もできれば即開館できるわけじゃないですよ。岡山芸術総合劇場は、今年の12月の末に竣工引き渡しを受けます。でも開館は来年の9月1日だと。その間、何をしているんだと、何度も聞かれたんです。それは何をしているかということ、開館準備期間をやる。準備をしていきます。何をしているのって、まず1つは備品の搬入ですね。これも何万点もあるので、1カ月どころじゃ済まないと思います。

それからもう1個重要なのが習熟訓練です。皆さん、この劇場の舞台の上には照明器具が何台ぶら下がっているでしょうか。これぶら下げなきゃいけないんですよ。それから、舞台機構を動かす。これもこれから造っていく劇場は、ほぼオール電動化される可能性があり、かなり危険な設備がついてくるんですね。照明器具が1個10キロから15キロくらいあります。これこの高さから今、落ちてくると私はきっと死ぬでしょう。それが落ちないようにしなきゃいけないのが舞台技術者の仕事です。

オール電動化されてくると、1個のバトンに1トンの積載物を吊ることができるようになります。だから速度も分速90メートル、1秒間に1.5メートルくらい昇降する速度が出るようになる。それは演出上求められている速度なので、絶対その速度で動くというわけではないんですけども、危険性をはらんでいる設備になる可能性があるんで、それに十分慣れ親しんで安全に演出ができるような習熟訓練を短期間でやらしてもらわなければいかん。照明だとか音響のオペレーションだけであればシミュレーションができるんですけども、舞台機構だけは現場ができてじゃないとシミュレーションができない。それに慣れていただく期間が、まあどうでしょう、ここの市民会館ぐらいでも半年くらい5、6カ月はみていただく必要があるだろうと思います。岡山では、なんだかんだ言いながら8カ月確保をしていただきました。ここも重要なポイントです。

大変重要なことを言うのを忘れていました。スライドは、皆さんのお手元の資料にも映っています。今、基本理念をつくってますけれども、それは最後までこの劇場の背骨になるワードなので、これ一番重要です。これがプレ始めると背骨がずれてくるので、それを大切に成長させていく必要があります。ただし、金科玉条のように生涯背負う必要はない。活動が、それからそこで働く人たちが成長していけば、その成長に合わせて変化はさせていくべきだ

と思います。劇場は常に進化をしている。変化をするものです。ずっと同じサービスを提供しているんじゃないです。成長する施設なんですね。ですので、成長に合わせて、この使命・ミッションっていうのも進化をさせていく必要があるというふうに思っています。

岡山芸術総合劇場の話を少し紹介させていただきたいと思います。

スタートは2023年、来年開館するんですけども、2013年から始まっています。既存の施設、市民会館・市民文化ホールのある方検討会っていうところから始まりました。これは、施設自体は、再開発で整備をされたので、民間施設も入っている施設なんですね。ただし、スタートは2013年。で、2015年から新しい文化芸術施設の整備に関する基本構想、皆さんと同じような作業を始めました。2016年には基本計画を策定しました。この辺りから、再開発でやろうというのが市のほうの方針として決定をし、候補敷地が3敷地あったんですけども、その3敷地のうち1敷地に絞り込んで手続きをこの2016年にしました。で、2017年に管理運営基本計画、それから18年に管理運営実施計画を策定し、その間に基本設計、実施設計を実施しました。それから2019年に着工し、今に至ります。

ただし、これ再開発なので、残念なことが1つあって、地権者の方がなかなか明け渡しをしてくれなかったということがあったんで、工期が9カ月実際には遅れています。で、設計施工一体型の再開発です。これ竹中工務店の設計施工です。

設計施工がいいかどうかっていうのは、十分考える必要がある。結果から言うと、やっぱり設計と施工は分けたほうがいいんじゃないかなあというのが私の印象です。

で、2019年から開館準備業務が始まり、財団の指定管理は今回のホールに関しましては、私どもは公募ではなく指定管理者、財団法人ですけども、公募でなく指定を受けることができました。指定期間は10年、これも文化をつくっていくためには時間がかかるというお話をさせていただいて、10年間で指定を受けさせていただいております。ただ、2021年からもう指定を受けているので、開館まで2年を要しているんで、運営し始めてから8年で指定期間が終わるので、7年後ぐらいにはまた公募になるか無指定で継続できるかっていうことになるだろうと思います。

で、8カ月の習熟訓練をしますが、この間にいろいろありまして、来年の6月4日にプレオープンというのをします。これはほぼ記念式典的なものです。それからその後に、市民にトライアル事業としてホールを1つずつ1週間に1施設ずつ無料で貸し与えて、どちらかというインリーチですね、私ども職員が十分機能するかどうかっていう試運転をやり、内覧会をやり、それから9月4日を迎えるという予定でいます。

という流れで、私も実は2013年から関わっているんですけども、来年でやっと10年目に舞台が開くようになります。実はもっと言うと、この市民会館、私は小学校三年生でヤマハオルガン教室の舞台に乗ったことがあるんですね。ですんで、それを直すっていう、建替えるっていったときには「ぜひやらさせてほしい」といって手を挙げて岡山市に行きました。そうしてたらいつのまにか館長をやらされていることになって、名誉なことではあるし、ぜ

ひやりたいというふうに今、思っているところです。

それからちょっと劇場の話を、岡山市をご存じの方もありませんけど、岡山駅、これ新幹線、それから山陽本線というのが、岡山のところだけなぜか山陽新幹線の横に走っているようです。ここだけちょっと南北に走っているんですね。

岡山シンフォニーホール、これが2,000席のコンサートホールです。それから岡山市民会館というのがあります。これとそれから岡山市立市民文化ホール、この800席です。これ1,700席です。この2つを整備して、ここに岡山芸術総合劇場を造ろうということです。

今、見ていただく黄色い線、これ1本ずつが実は1キロあります。この囲われている間が中心市街地に当たる部分です。で、これがなかったらどうでしょう、碁盤の隅が空いている感じになりますね。今、ここがメインの商店が表町商店街っていうんですけど、当然上は栄えているんですけど、だんだん下へ行くとシャッター街になってきます。市としては、その町をちゃんと再生させると、そのための起爆剤としてホールを造れっていうことになったというふうに受け取っています。ただし、来にくいところにお客を呼べっていうのは、それは劇場にとってはもうすごいアウェイですよ。駅前には造ってくれるとすぐ来れるので、お客さん来やすいと思うんですけど、「ここか」と思ったんですけど、これはもう与えられた使命なので、やるしかないというのが現状です。好んでそうしたわけではありません。それからオランダ通りという通りがあって、それが再開発でちょっと一番下で曲がるようになりました。

岡山芸術総合劇場の概要、これはもう皆さんのお手元に配っているので、簡単に言うと大劇場1,750席、プロセニウムです。中劇場800席、ここに音響反射板を持っています。大劇場にはありません。これは2,000席の岡山シンフォニーホールに配慮した役割分担だということです。それから小劇場、これはブラックボックス、平土間のホールです。それから大練習室、実はこれも途中から興行場として使えるように手配をしまして、これも300人入れることができます。ということは大きく言うと4つ劇場があるという施設、あと練習室が11室、それから後で説明します、製作工房というのを3室持っています。

そのプランがこれですね。これは表町商店街がここにあります。実は木下サーカスの本社がここにあるんですけど、それは別として大劇場、中劇場、これは音響反射板を持っています。

下に行くと地下2階に平土間の小劇場があります。上にいくとここにこれが3階・4階ですけども、この水色に塗られている部分、ここに9か所の練習場が大小あります。で、あとは隠し球が7番ですね。これが劇場でいうとたたき場という、背景をつくったりそれから色を塗ったりするスペースがあります。それからこれが衣装だとか縫い物ができる部屋として用意をしています。それからこれがパネルソー（鋸）だとかがある工作ができる部屋ですね。それを内部に備えているという劇場です。

大きくはこっちが劇場とこっちが事業棟と言いまして、この上に4層の事務所とそれから

8層のマンションが載っているということです。なぜか知らないけど、このマンションが大京観光のマンションなんですけど、劇場がついたマンションとして売られて、既に完売をしております。すごい劇場のキャッチコピーがついたチラシが配られるんですけど、いつか我々にもその恩恵が返ってくるだろうと思っているんですけど、さあどうでしょう。

で、事業のイメージとしては、こういうことを掲げています。ミッションとしては「魅せる」、「集う」、「つくる」という大きなミッションを掲げ、それを7つの事業で構成をしていこうということを基本計画のときに決めました。「みせる」、「したしむ」、「つどう」、「ささえる」、「つくる」、「はぐくむ」、「つなぐ」イメージとしては、今は劇団四季も宝塚もみせようと、その効果として集っていただくことができるようになるだろう。ただし、つくることを、少しずつ色を染めていって、最終的にはつくるものでみせるということができないいいなあというイメージを絵にしました。

で、現在、これ2016年の話ですけれども、開館をし、来年ですね。それから今後どういふうに高さを成長させていきたいということと、その舞台芸術の魅力を広げていきたいというイメージをつくりました。ただ、波及派生効果も生かさなきゃいけないということで、活動を周りに広がらないということで、国際交流だとか産業、観光、福祉、教育、男女共同参画、そういうところに広げていきたいというイメージでいます。

それから目指す姿として、これはご存じの方あるかもしれませんが、これ実は劇場法に書かれていることをちょっとパクってくるんですね。「新しい広場」をつくりたいということと、「世界への窓」、これ実は劇場法という法律、劇場・音楽堂等活性化に関する法律っていうのが正式な法律のタイトルですけれども、そこの中の前文に書かれている文章をそのままパクっています。「新しい広場」、皆さんも「飯田のひろば」という言葉を使うようとしていますけれど、そこにどういう意味が込められているかっていうのを考えていただきたい。それから「世界への窓」これも重要なキーワードです。

ここからは飯田のことについてちょっと触れておきたいと思います。2、3分で終わりたいと思いますが。

これが今、東京からの各主要都市の距離です。見ていただくと仙台まで最短で96分で行きます。東京からですね。新潟96分、長野79分、名古屋100分、新潟市民の方たちは新潟都民だということがあります。それから長野新幹線ができたときに駅長は、「東京は長野の一部だ」というような発言をされている。79分ですから。今、東京の上野の文化会館でオペラを観ても新潟帰れるんです。さすがに飯田は4時間半かかるからとても帰れるわけがないというのが現状ですが、それが品川と飯田が45分、それから名古屋が先ほど松下さんの話だと25分というお話だったんですが、数字がちょっと違っているかもしれない。ということになってくると、どこよりも、仙台よりも、新潟よりも、長野よりも、名古屋よりも東京は近い距離になるっていうことがどういう効果をもたらすのかっていうこと、利便性をもたらすのかっていうことをしっかりと踏まえる必要があるだろうと、時間距離は驚異的に変わり

ます。

それからもう1個、圏域を捉えた機能重心の考え方。これちょっと今回のためにつくったんですけど、上が専門性のある施設、多機能性のある施設、それから広域、地域っていう考え方、どこに重心を置いて施設を考えていくかっていうキーワードの1つとしてつくりました。これが全てではないと思います。

代表的な国立の劇場っていうのは、専門性を備えて広域を担う役割を持っている。地域っていうのを考えたときに地域とはどこか。この施設が担う地域っていうのは、市内のことを言っているのか、南信州なのか、南信地方なのか。それから広域とはどこか。この先にはきっと東京っていうのがあるかもしれない。それから世界っていうのがあるかもしれない。どこを目指して広域と呼ぶか、この施設にとってですね。これらを十分考えていただきたいというふうに思います。

簡単に思いつきで置いているので、これは正しくないんじゃないと言われるかもしれませんが、長野県域だとか松本、伊那、この辺の県民ホールっていうのは広域的で多機能ホールだろうというふうに思います。で、軽井沢の大賀ホールなんかは専門性が高い。ただし、広域的ではないかもしれない。ただ、フェスティバルやっているとかなんかは、もっともつとこちにあるかもしれません。それからまつもと市民芸術館、これも専門性が高く、ぴったり地域ではないと思います。もうちょっとこちかもしれませんね。それから長野市民芸術館、それからサントミュージゼ辺りももう少し上、あるいは広域施設かもしれないなあというふうに思いながらちょっと書かせていただきました。

最後、基本理念が伝える背景、これはどういう言葉として伝えるかっていうことをじっくり考える必要があるだろうというふうに思いました。これは勝手に私が解釈して書いているだけです。「みんな」って言われたときには、きっと高齢者も、子供も、障がい者も、収入差がある人も、それから性別も、国籍も含めて「みんな市民だ」という考え方だろうというふうに思います。

「集う」っていうのも交流する、参加する、集合する、会合する、群れる、寄り添う、いろんな関わり方がある。

それから「創る」っていうのもこれも今、漢字で書いてありますけれども、この創造、それから創出、制作、それからこの辺はプロデュースっていう、それからものをつくるっていうのも製作、それから構成、構築、そんなことも入るんじゃないかと。

一番のキーワードは、この「ひろば」っていうことと「飯田」。この飯田っていうことがあるということは、地域ということをちゃんと意識をしようという施設だろうというふうに思いました。

それから「ひろば」っていうのは空地、原っぱ、野原、それから公園、パブリックなスペースっていうことでもあるかもしれません。

ぜひ、この一つ一つの言葉が持っている何を伝えようかとしているかっていうことを改め

て考えていただいて、この言葉から出てくる、この言葉を実現するためには、どんなことをしなきゃいけない施設なのかっていうこと。何をしなきゃいけない施設なのかを考えていただいて、それを実現するためにはどんな機能を備えなきゃいけないのかっていうのが、これからの基本構想、基本計画の流れだろうというふうに思います。最終的には1つしかできないんですね。ハードは。皆さんは1,000席のホールがほしいというかもしれないし、2,000席のホールがほしいというかもしれない。いろんな意見があるんですけどもできるのは1つです。そこで何かを捨てなきゃいけないかもしれない。そこを決断していくっていう必要が最終的にはあります。もちろん2,000席のホールと1,000席のホールが造れば要求は満たされるかもしれないけど、そうはいかないかもしれない。それはお金の問題だったり土地の問題だったり、いろんな要素があります。ぜひその辺も考えていただきというふうに思います。

最後の3つのスライドは、ぜひ皆さんに考えていただきたいキーワードとしてお話をさせていただきました。

以上、私の話は少し延びてしまいましたが、申し訳ございません。終わりたいと思います。ありがとうございました。

(拍手)

○委員長 草加先生ありがとうございました。

ここで委員の皆様から質疑があればお願いしたいと思います。

終わったばかりで突然ですが、何か質疑がありましたらどうぞ発言ください。

よろしいですか。

どうぞ。

○副委員長 先生、ただいまの貴重なお話しありがとうございました。非常に参考になりました。

ちょっと全然違うかもしれませんが、私たまたま先月仕事で北イタリアのほうに行っただんですけども、イタリアっていう国は60も世界遺産があつて、都市、都市がもう世界遺産があると変更が効かない中で、古いものをそのまま生かすっていうような全てが、だから市庁舎だとかも美術館の隣の古いものを使ったりということなんですけども。日本で言うと地震やなんか多いんで、建替えたほうがいいんだろうということなんですけども、ヨーロッパなんかの古いホールとかっていうもののあり方、それは従来からある何百年もたっているようなもの使ってるのと新しいものを使うと。新しいもの使えば新しい設備が使えるんで、いろんな表現もできると思うんですけども、そんなところはヨーロッパなんかはどんなふうにそういう古い施設との融合をしていったりするんですかね。

○草加講師 ヨーロッパでよく100年以上たっている劇場っていうのはありますけれども、例えばミラノスカラ座もこれ大改修をしました。でも大改修をするときに、どこまで壊しているかっていうと、もうほぼスケルトンの躯体スケルトンの状態まで落としちゃうんですね。屋根も取るし、それからスノコも付け替えるし、簡単に言うと建替えたほうがもっと安くできる

んじゃないかっていうくらいお金をかけて、躯体を残して、外観を保存するというよりも継承していくっていう、街並みを継承していくっていう考え方で建替えています。ですんで、簡単にチョロチョロと直しているわけじゃなくて、相当激しくスケルトンの状態まで戻して、その再利用をしていると思っていただければいいと思います。

それはイギリスのシェイクスピアシアターなんかもそうですし、それからロイヤルオペラハウスもそういうことをやりました。日本でいうと、私どもがちょっとお手伝いした中でいうと、京都のロームシアター京都、これはもうほとんどスケルトンの状態まで戻して、こんな梁は落としたほうがいいんじゃないかというくらいのとこまで取りまして建替えています。ただ、ロームシアター京都の大劇場は建替えています、ほぼ。それから小劇場のほうはスケルトン、もう躯体だけ残してあとを付け替えたっていうこと。近いのは、ロームシアター京都の改修が海外でよくやられている改修に近いだろうと思います。

ただ、先ほど言いましたように、ちゃんとメンテナンスをしてない施設っていうのはなかなか建替えにくいんですね。もう躯体まで駄目になっているような施設もあるので、簡単に言うと建替えたほうが簡単だから建替えているっていうのが現状だろうというふうに思います。

○委員長 はい、ありがとうございました。

ほかにはいかがでしょうか。

どうぞ。

○委員 本当にとても勉強になるお話ありがとうございました。

〇〇と言いますが、最後に先生がおっしゃった決めるときに捨てなくちゃいけないものがあるっていうお話をされたんですけど、僕は一番やっぱりすごくなかなか難しいなあと思うのは、市民、個人がつくるホールとか企業が作るホールであれば、専門性とかそこに特化したもので全然問題ないと思うんですけど、やっぱり市民のホールっていうことになった場合に、捨てるものがあるということはそれができなくなる人たちがいるっていう話になるんですけど、それをどういう目安で捨てていくかっていうのは、非常に難しいな思っております。先生はどんなふうにされているのかなとちょっと伺いたいです。

○草加講師 一番最大公約数を残すか最小公倍数を残していくのかということですけども、最大公約数を残すのがベストではないというふうに思います。ただし、まず大きいのはこの基本理念をどう実現していくのかということと、松下さんが一番最初にお話をされたように、オンリーワンは何かっていうことを考えていく。その中では、何を残さなきゃいけないのかっていうことを考えていただく必要があるとだろうと思います。

私は、実は「いいだ人形劇フェスタ」を観たことがありません。でももう何十年も前から飯田って言われると人形劇フェスタだというふうに思っています。それから数日前も飯田に行くんだっていうある劇場関係者に話をしたら、「フェスタ終わっているでしょう」っていうふうに言われました。というぐらい人形劇フェスタっていうのはこの飯田の象徴に、我々

劇場関係者の中では象徴になっているとあっていただければいいと思います。

これもオンリーワンの可能性がすごく高い。ですので、これをちゃんと磨いていくっていう方法もあるだろうというふうに思いますし、また違うオンリーワンをつくりだそうというのもそうだと思います。

こういうものがあるまちっていうのはいいなというふうに思いました。岡山でいう総合劇場には今それがないんですね。ただし、今、私どもはシンフォニーホールがあるので、こう言ってます。「私ども岡山芸術総合劇場は、演劇とダンスと伝統芸能をやっていく劇場として整備をする」というふうに言ってます。あまり詳しい戦略があるわけじゃないんですけど、伝統芸能っていうふうに言ったときに、「それは何をやるの」ってみんな聞いてくれます。詳しい話はまだできませんけれども、そこも一つ我々が磨いていかなきゃいけないところだなと最近思っているところです。

はい、以上です。

○委員長 はい、ありがとうございました。

ほかにはよろしいでしょうか。

それじゃあ館長お願いします。

○下井館長 はい、ありがとうございました。

それでは、これからパネルディスカッションに入ってまいりますので、ちょっと場面転換のご時間をいただきたいと思います。準備のほうよろしく願いいたします。

草加先生には講演いただきましてありがとうございました。

それでは皆さんもう一度といたしますか、最後にといたしますか、拍手でお礼をいただきたいと思います。

(拍手)

○下井館長 ありがとうございました。

②パネルディスカッション [特別対談]

○松下参与 それでは、ここで草加先生とご一緒に特別対談をお願いする登壇者の方々を着席順にご紹介します。

まずは佐々木学識委員であります。佐々木先生につきましては、明治大学の教授として建築・アーバンデザイン研究室にて公共空間、特にストリート空間の活動に関する研究をされておいでになります。特に飯田との関わりでは、裏界線の商業利用の可能性を学生さんと一緒に示されたり、最近では橋北地区の春草通りの活用について実践的なお取組をいただいたり、さらには先だってもう行われた東京渋谷区の交流にも関わっていただいております。さらには天龍峡の空き店舗の活用ですとか、今、下伊那農業高校の生徒さんたちと地域の竹を活用した移動式の鳥小屋の製作等々の活動もされておまして、まさに飯田市民の皆さんとつながった実践的な活動を通じた研究をされながら、都市と地方の新たな連携のあり方、可

能性をいろんな形で提案サポートいただいているということでもあります。

続いて、山元 浩学識委員であります。山元さんにつきましては、名古屋フィルハーモニー交響楽団の演奏事業部長として名フィルの演奏企画を担当されておいでになります。飯田との関わりは、アフィニス夏の音楽祭で運営委員として関わりを持っていただきまして、現在は「オーケストラと友に音楽祭」のパートナー・オーケストラであります名古屋フィルハーモニー交響楽団側の事務局として尽力をいただいております、既に飯田との関わりは15年間にわたって続けていただいております、ご指導、ご協力をいただいております。なお、山元さん、名古屋市の市民会館の整備検討懇談会の委員もされておりました。「新たな劇場の基本構想づくり」にも関わっておいでになられたということでございます。

続きまして、小澤櫻作学識委員であります。小澤さんにつきましては、現在、上田市のサントミュージゼ、上田市交流文化芸術センターのプロデューサーとして活躍をされておいでになります。また、長野県の文化芸術振興計画の策定に係る有識者懇談会の委員としても携わっておいでになります。小澤さんにつきましても、アフィニス文化財団に以前所属をされておりました。アフィニス夏の音楽祭をその財団のほうで主担当をされておいでになったということで、そのときから飯田とのつながりを持っていただいております。また、上田市以外でも神奈川県平塚市のホール、また大分県竹田市のホール、さらには徳島県のホール等々の管理運営計画の検討委員やプロデューサー等を務められるなど、まさに全国各地の文化芸術ホールの事例に精通されておいでになる方でございます。

草加先生については、先ほどご紹介を申し上げましたので、この場では改めてさせていただきますけれども。

最後に塩澤委員であります。塩澤委員につきましては、「オーケストラと友に音楽祭」実行委員会の実行委員長として、まさにこの地域の舞台芸術活動をリードしていただいております。第1回の委員会の中で委員の皆さんの互選により委員長をお願いすることとなり、委員会の進行を現在まで行っていただいております。また、飯田市の飯田文化会館の舞台芸術鑑賞事業の企画委員長、飯田文化協会の副会長などの要職に携わっていらっしゃいます。

以上、それぞれの登壇者の皆さん方のご紹介をさせていただきました。

それではここからは、佐々木先生に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○佐々木委員 ただいまご紹介いただきました佐々木でございます。

本日は、進行役ということで、できる限り充実した意見交換ができるように務めさせていただきます。

まず、「リニア時代の飯田にふさわしい『新飯田文化会館のあり方』」というテーマでの意見交換ということになるんですけれども、まず非常にフォーマルな雰囲気なんですけれども、委員の皆さん、さん付けで呼ばせていただければよろしいでしょうか。

まずは、草加さんから非常に示唆に富む、またポイントが明快なプレゼンテーションをしていただいたというふうに思っております。

私自身お話をお伺いして、この議論を進める上で特にそのリニア時代のふさわしいという観点から見たときに、非常にポイントになるなと思ったのは、劇場という施設を造るわけですけども、ここ 10 年ぐらい劇場という施設の役割というのが、戦略的な利用というものに発展してきているというのは、非常に飯田市でのこの新文化会館というのを考える上で重要な指摘だなというふうに思いました。まちをつくる、賑わいをつくる、人をつくるという役割をこういった劇場というものが果たすべき時代にきているという視点、そういった視点で捉えたときに、これからの飯田の新文化会館というのは、どういったものになるべきなのかと。それはすなわち施設という箱という枠を完全に越えて、もう都市や地域そのものに働きかける存在になっていくというご指摘が非常に重要だなというふうに思いました。

また、私は全くこういう劇場等は素人なんですけれども、草加さんに講演をいただきましたこの 2 軸の考え方、地域から広域という横軸と、専門性・多機能性という縦軸、この 2 軸というのもおそらく今まで委員会で議論をしてきた中でも、そのどこに位置づけていくのかというのが、かなり重要な議論であったと思いますし、今、もう講演の後の質問の中でも、かなりその辺りに切り込んだ質問というのがなされたというふうに思っております。

本日は時間も限られてますので、先ほどの戦略的な利用、まちをつくる、賑わいをつくる、人をつくるという役割までも新文化会館に想定した場合に、この横軸と縦軸に対して、どのようなアプローチが考えられるのかということ。すなわち 1 つはリニアが開通し、東京から 45 分、あるいは東京まで 45 分、名古屋から 25 分、名古屋まで 25 分というふうになったときに、この地域と広域というこの横軸に関してまずどう捉えていったらいいのかというポイント。それから 2 つ目のポイントは、専門性と多機能性といった機能という縦軸。これは創造と鑑賞のバランスといったような活動の内容に関わる部分にもなってくると思うんですけども、この縦軸の中での位置づけ、この 2 点に関してそれぞれ様々な立場でこういった劇場等に関わってきた皆さんのお話をお伺いしたいというふうに考えておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、まず 1 点目の地域・広域、特に東京・中京圏との関わりの中で、この飯田の新文化会館というのはどういうふうに考えていったらいいかということをお伺いしたいと思うのですが、まずは山元さんからこの辺りどのように考えられるか。お三方、まずは順番にお伺いして、またそれに対して草加さんの反応もお伺いしたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

○山元委員 名古屋フィルハーモニーの山元でございます。

今月は飯田に来る機会が非常に多くて、もう今日で 3 回目になるんですけども、私も今、草加さんのお話、私もオーケストラに入ってもう 30 年になるんですけども、最初、ステージマネージャーというオーケストラ付きの舞台監督の仕事から始めたものですから、劇場に非常

に興味があるんですね。オーケストラというより、どちらかと言えば劇場のほうに興味があってこういう仕事を始めたところがあるんですけども、今、本当に小一時間でしたけれども、充実したお話を伺って、これまでも委員の皆さんのほうでいろんなお話も伺いながら今日、草加さんのお話を伺って、より劇場の具体的な姿がちょっと見えてきたかなというふうになんかワクワクしながらお話を伺っていました。

今のリニアが走ることによって時間的な距離が非常に短くなる。それについては、私もこれははっきり言ってリニア走ってみないと分かんないところはあると思うんですよ。実際にリニアどのくらいの方が利用されて、どういう形で飯田のまちとの行き来が始まってくるのか。また、それに伴って当然ながら飯田市もまちの賑わい、活性化されるというところでのいろんな展開も考えていかれるとは思いますが、単純に飯田にじゃあすごい素晴らしい劇場ができます。じゃあ首都圏から中京圏からどれだけのお客さんが来るかということ、私は正直言うとそこまでは期待できないんじゃないかなと。ほかの地域から来るというよりは、どちらかと言えば飯田の皆さんが首都圏に行きやすくなる、中京圏に行きやすくなる。そういう意味でのリニアの利用の仕方になってくるのかなと、外からやっぱりお客様を招くというか、呼ぶっていうのはなかなか現実的には難しいんじゃないかというふうに思います。

なので、どちらかと言えば今の飯田のまちに沿った、まちの規模に沿ったものを劇場としては望まれたほうがいいのではないかなというふうに思うんですけど、それはなぜかということ、私たちオーケストラというのは、演奏団体でありながらオーケストラとしては主催をして名古屋では演奏会をやる。当然そういう中では名古屋でしか聴けないコンサートをやる。当然新幹線が走っているということで、首都圏からも関西圏からもお客さんが集まってこられます。場合によっては、飛行機を使って全国北から南からお客さんが集まってくることもあります。ただ、それは本当に年に1回、もしかすると数年に1回、そういうプログラム、そういう出演者が来るときだけなんです。なので、そういうときのためだけに立派な劇場を造るっていうのは、なかなかそれはちょっと現実的にそぐわない。劇場の規模が大きくなればなるほどランニングコストがかかってきます。要するにお金がかかるわけですね。劇場を維持していくために。いろいろなこともあるので、なんとなく飯田のまちにはこのくらいの規模の劇場が一番望ましいんじゃないかなというのもちょっと思ったりしますけれども、先ほど資料でも拝見した劇場・音楽堂が担う役割の中で30年前、20年前まで、20年前からということでお伺いしています。

その中で、市の成長戦略としての劇場の活用というふうなお話がありましたが、これは非常に私、興味を持って伺ったところであって、飯田のまちっていうのは既に私これも今までの委員会でもお話ししましたが、私たちはアフィニスの音楽祭で関わるきっかけになって伺っているわけなんですけれども、飯田の皆さんというのはそれを楽しむだけではなくて、時には出演者となって劇場に立つとか、またそこにいる皆さんが劇場の何か事業をおやりになるときに皆さん集まって今度は裏方としても活躍される、そういう方々が非常に多い。こ

それはもう全国的に見てもまれなケースであって、これは本当にほかではなかなかないこと。それはもっともっと市民の皆さんが誇っていただいているんじゃないかなというふうに思っています。

既にそういう土壌があって、劇場の活性化に向けて動き出すそういう土壌があるっていうことは、飯田の強みだというふうに思ってますし、なのでそれを新しい劇場ができることによって、これまでそんな中でもやっぱりなかなか劇場にこれまでは足が運ばない、劇場に足を運ばない方、自分たちがその劇場っていうものにあまり関係ないというふうに思っている方々もいるとは思いますが、新しい劇場がもっと幅広い役割を持っていくようになればそこにより幅広い方々が集まる。それをまた次の世代に継承していくというよなところでできればいいんじゃないかなというふうに思っています。

人形劇、劇場関係者の中では飯田は人形劇のまち、私たちオーケストラ、クラシックの演奏の団体からするとやっぱりアフィニスの音楽祭のまちというふうに飯田は位置づけられますね。そういうものがあると、全国的にも認知度が非常に高まってきますし、実はだから飯田の皆さんが思っている以上に全国に飯田を知っている方っていうのはかなりいらっしゃる。そういうことは、本当に誇りに思っていたらいいんじゃないかなというふうに思っています。

ごめんなさい、あまり長くなるとあれなんですけれども、やっぱり私たちオーケストラで地方都市に、地方都市というか名古屋も地方都市なんですけど、いろんなまちに行って公演することがありますけれども、やっぱり劇場を造ってそれが目的に、劇場を造るのが目的になったようなホールというところはやっぱりそこ、そのまちにはその劇場を活性化させる皆さんが育ってらっしゃる。それは聴衆としてもそうですし、利用者としてもそうです。なので、何か催しがあるときだけお客さんがジワジワジワジワっと集まってこられるんですけども、それ以外は人が集まらないので、施設もどんどんどんどん寂れてきてしまう。飯田の文化会館というのは本当に50年たって古いんですけども、そういう意味では非常に利用の頻度が高くて、賑わい、外から見たらそういうふうに見えないんですけども、私たちから見ると非常に賑わいを持った劇場、地方都市の中ではそういう役割を持っている劇場の1つなんだろうと、じゃないかなというふうに思います。

ちょっとごめんなさい、とりとめのない話になっちゃって。私、以上です。

○佐々木委員 山元さん、どうもありがとうございました。

リニアが開通したとしても劇場に関して言えば、飯田から東京等への流れというのはかなり生じるだろうけども、逆は決してそれほど多くはないんじゃないかな。そういったことを考えると、飯田及びその周辺地域というところが主要なターゲットということになって、その中でふさわしい規模、それから飯田ならではの劇場、そういったものを造ると、そういうような方向性があるのではないかというご意見だったかと思います。

それでは次、小澤さんお願いいたします。

○小澤委員 小澤です。こんばんは。よろしくお願ひいたします。

今回のこのリニア時代の新しい文化会館というお話と今日の草加さんのお話を伺いまして、ちょっと考えてたんですけども、上田に私が勤めております上田サントミュージーゼに置き換えますと、やはり新幹線とサントミュージーゼというセットになってくるのですが、ただ、造られた時代が大きく違うので、新幹線が通ったのはオリンピックのときですから、98年のちょっと前くらいですかね。僕はまだ関西に住んでいた時代なので、あまり詳しくはないんですけども、サントミュージーゼができたのが14年かな。そこで大きく時代が違うんですが、今の上田ですが僕も10年ほど住みまして、上田のまちはその視点で見ると、新幹線ができたことによって、より皆様よくご存じのとおり、駅前ががらりと変わったと伺っております。それは今でもよく分かりますし、また大きなショッピングセンターができたりとか、そして見た目というところと機能というところで、大きくまちが変わって発展した、賑わったというイメージをお持ちになられているかと思います。

ところが一方で、関西で生まれ育って東京で住んでいた僕が上田に行くと、駅前に地元のお店が少ないんですよ。チェーン店が多いんですよ。やっぱり皆さん北海道に行ったらやっぱり回る寿司に行きたくないじゃないですか。やっぱりそのように僕も長野県上田に行けば地元のを食べたいと思うんですけど、駅前だと本当にチェーン店しかないんですよ。

やはり賑わい、そういった中できてまちが変わっていくときに、賑わいをつくっていくと考えたときに、賑わい方っていうのをイメージしていくことがとても必要だと思っております。

新幹線ができたその98年の時代の賑わい方っていうのはやはりそういった建物がどんどんできるという時代。ちょっともうバブルは弾けてたと思うんですけども、ハード面はどんどん変わって行って、ちょうど時代も全国のチェーン店が展開していく時代と重なって、そういったものになってきたと、僕は勝手に想像しているんですけども、一方で、サントミュージーゼができたのはここ10年です。そこでの賑わい方っていうのは、やはりそういったものを市民が求めているわけではなくなっている、そういう時代ではなくなっているときに、やはりどういった動きがあるのかというと、そのときにはシャッター商店街寸前のまちがそこにあったわけですね。僕もそこに着任したときにすぐに見に行くと人とお話をしたときに、やっぱりこのまちを再開発ができればね、みたいな話を、劇場とセットでねということをしたんです。ということで商店街とかまちなかへのアプローチっていうのが事業、プロジェクトでは、劇場がアプローチしていくというのがどんどんどんどん増えていきました。

そのときの賑わい方は、やはり今度はリノベーションなんですよ。古い建物を残して中を改装して新しい感覚センスでお店を開いていくっていう。賑わいをつくっていくという。賑わい方が、またこれが時代によると大きく変わってきた。そのときに劇場として求められることと、じゃあ劇場はそこでお店をつくるわけじゃないので、どうしていくかということ、そ

ここで何か活動していこうという人たちとつながって行って何かおもしろいことを仕掛けていくというところに動きました。

そのことによって今、まちで元気で頑張っている方々がというのはサントミュージゼとつながっている方が多いなというイメージがある。もちろんそれだけじゃないですけども、だと思えます。

なので、賑わい方っていうときに、やはり賑わいをビジュアル的にも大きく違いますし、新幹線の時代と今では賑わい方をつくるためには人を育てていく、人を育てていくというこちらが育てるわけじゃないですけども、人が元気になっていくというところがすごく大切な時代になったんだろうというふうに感じておりました。

お話を伺って、やはり新幹線があって東京から近くて、東京から人がたくさん来るかという、やっぱりそうではないです。先日大きな舞台、乃木坂の方が主演する大きな舞台があったんですけども、その後アフタートークで乃木坂の方が東京から来た人、長野県内の人っていう手を挙げてもらったら、ほとんどがやっぱり長野県内だったというのが、やっぱりああそうなんだなってそのとき思いましたし、ただやっぱり東京が近くなった分、皆さんがどンドン動いて地元の若い方々が元気になってきたところもありますので。

あともう1つ新幹線がいいなと思うのは、いいなと思いつつもまた難しいようなところが、新幹線ができることによって上田が目的地になるわけではないんですよね。そこに来てどこかにやっぱり皆さん東京の人は散らばっていくわけなので、そのときの通過点になるだけじゃなくて、1日でも滞在してもらえそうなまちづくりというところはちょっと意識して、サントミュージゼでも活動していますし、そういう商店街っていうのを元気にしていきたいという視点があつたかなというふうに気がつきました。

私からは以上でございます。

○佐々木委員 はい、ありがとうございます。

山元さんと同じく、地域、あまり外から来るということに期待をし過ぎるのではなくて、地域を重視するというお話だったと思いますけれども、少し違う視点からお話をいただいたのは、先ほど私が最初に提示をさせていただいた戦略的利用、まちをつくる、賑わいをつくる、人をつくるといったような視点の中で、この劇場というものから飯田ならではの賑わいをつくるということの重要性、それはナショナルチェーンがあるようなそういった場所ではなくて、その飯田らしさと一体になった賑わいとかまちづくり、そういったものに寄与するものであるべきではないかというようなお話から、やはりその地域への焦点を当てるといったことの重要性をお話いただいたというふうに理解をさせていただきました。

それでは、塩澤さんお願いできますでしょうか。

○委員長 塩澤です。

今、お二方の話をお聞きして、まず人は来ないよ。ああなるほどな、JRでは乗降客6,000人とか言ってますけど、それはないだろうなと私も薄々思っていました。

そうすると、私たちが今、検討委員会でやらなきゃいけないのは、やっぱりリニアが来たときに、飯田のまちはこんなふうになるんじゃないかっていう予想をまず持つことが必要だろうなということが1つ。それから2つ目は、「飯田にふさわしい」っていう言葉が使われてますけれども、ふさわしいってどういうことなんだろうか、飯田らしいってどういうことなんだろうか。その辺を今、山元さん、小澤さんが外から見たときにあるいは外から飯田へ来られたときにこういうふうになっているっていう飯田の良さを教えていただきましたけれども、その辺を私たちがやっぱりなるほどねっていうふうに納得しないといかんだろうなっていうことを思います。

それから、3つ目は、草加さんのお話の中に「人が寄ってこない、普段振り向いていない人たちをどうするか」っていうことがあったように思うんですが、委員会の中でも話題になりましたけれども、使って活動している人、鑑賞に来ている人はいらっしゃるんですが、「文化会館、うーん」って言ってる方たちをどう巻き込むか、その辺もやっぱり飯田らしさ、飯田にふさわしいってことを考えたときに、重要な課題かなというふうに思ってます。

いずれにしても飯田ならではのやっぱり新文化会館であってほしいと思いますし、そこに携わる、あるいは関心を持ってくださる方たちを増やしたいという願いを強く持っています。

以上です。

○佐々木委員 はい、ありがとうございます。

最初のお二方が、どちらかという外から飯田を見た視点で語っていただいたのに対して、今、塩澤さんには、飯田を内側から見たときにそれじゃあ飯田らしさ、飯田にふさわしいは何なのか。自分たちのまちをどんなまちにしていきたいのか、リニアが開通したときにどんなまちになっていたのか、その先にどんなまちにしていきたいのかということを明快にしながら、そういったものと呼応し合うような劇場のあり方っていうものを考えていく必要があるというようなご意見だったかと思います。

それでは、お三方のご発言を受けて、草加さんご自身の講演の内容ともちょっと照らし合わせながら感想を、ご意見などをいただければというふうに思います。

○草加講師 お話を聞いて改めて思ったんですけども、私はプレゼンの中で時間軸がこんなに短くなるっていう話をしたんですけども、そう短くなることで何が起きるのかっていうことを待つじゃなくて、その短くなった時間をどう生かすかっていうふうに考えなきゃいけないだろうと思います。

先ほど、小澤さんが言われたように、「新幹線が来たらチェーン店がいっぱいできるんです」って、それは結果としてはそうなるかもしれないけど、それはもう経済としてそうなることはあるかもしれないけど、じゃあ個人としてはその時間軸をどう短くなったのを生かしていくのか。それは簡単に言うと、東京を、あるいは名古屋をどう使うかっていうことを考えていくべきだろうなと思います。

もちろんその舞台芸術っていう話であれば鑑賞するっていうこともそうかもしれないし、

それからそこからプロダクションを呼ぶっていうこともそうかもしれませんが、そうやって首都圏、あるいは中京圏を使う、うまく使っていくための手段としてこの時間軸を使っていく。これが一つの戦略になるんじゃないかなと。結果を待つっていうのは、さすがにあまりポジティブではないような気がしたので、そこを考えていく上でじゃあ施設はどう考えていくのかっていうことも一つアプローチとしてはあるんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

- 佐々木委員 時間が短縮される。4時間半くらいかかるところから45分に短縮される。それをどう利用するかって、普通に考えると要はそれは劇場に人を呼ぶということの視点だけで捉えがちですけども、今、草加さんがおっしゃったのは、要はそれ以外にもつくり方とか使い方とか、そういったもので、逆にその時間軸が短くなったことをどう戦略的に使っていくのかっていう視点は重要じゃないかと。要は、人はあまりこないかもしれないけれども、短くなるっていうことはそれ以外の活用の仕方もあるという非常に戦略的な、まさにまちをつくる、賑わいをつくる、人をつくるといったようなところにもそういったものは考えが及ぶんではないかと。ちょっとリニア時代というものに対しての、新たな視野をご提示いただけただかなというふうに思いながら今、聞かせていただきました。

時間も限られてますので、2つ目の軸、既にご発言の中でその辺りも触れていただいた部分もありましたけれども、創造と鑑賞のバランスであるとか、あるいは専門性と多機能の軸の中でどう位置づけるのか。その中で非常に先ほどクリアな議論があったと思うんですけども、捨てるものがあるといったときにその捨てるものに対してどう考えるのか。最大公約数的な解もあり得る中で、それは決していいものではない。その辺りは、おそらく何度かキーワードに使われているオンリーワンっていうものをどう捉えるのか。ナンバーワン、オンリーワンっていうのをどう捉えるのか。これまでの地域とか広域とかそういった軸の中のご発言でも、その辺りに関するご意見というのは出てたと思うんですけども、今度はその辺りに絞りまして、さらにちょっと深めたご意見をいただければというふうに思います。

山元さん、まずお願いできますでしょうか。

- 山元委員 そうですね、ちょっと先ほど劇場自体の話をするれば、専門性とか多機能ということで、いろいろな劇場の変遷の中にも多目的ホールとかいろんな言葉がありましたけれども、今、飯田が置かれている状況という、飯田の文化会館1,200、1,300弱のホールがある。で、この人形劇場、これがキャパシティ200の劇場ですよ。ここでも人形劇だけでなくコンサートも開かれる、いろいろこういう人の集まりにも会場にも使われる。で、これまでは、市の公民館がありました。あれがなくなっちゃった。それから県の公民館がありますけれども、実はあの2つっていうのがコンサート、ミュージカルだったりいろいろ市民参加で皆さんが制作されている出し物とか、一番実は公民館が使われているケースのほうが多いのかなというふうに思ったりしますけれども、あの規模のホールというのは、飯田にやっぱりまだ

足りないというか、より施設充実した施設の中であのくらいのホールが必要なんだろうな。また、大ホールも当然ながら、オーケストラなり名フィルのためにコンサートホール造ってくださいよって僕らは言いたいんですけど、そういうわけにはいかない。いろんな出し物にしなければいけない。となってくると、多目的っていうふうになると思いますが、多目的っていう言い方をちょっと変えると主目的、主な目的としては例えばクラシックのコンサート、飯田の皆さんが何を望まれるか、これはまだまだ議論を進める、判断を深めなきゃいけないところですけども、やっぱり生の演奏なんだとか、もしくはまた違ったジャンルっていうご意見もあるかとは思いますが、何かそういうものを年間で一番使う頻度の多いものを主目的っていうような形でやられて、でもそれ以外にも使えるんだよと、そういう技術でカバーしてできるようなその劇場の作り方っていうのはあるのかなというふうに思っています。

先ほど私あれでしたけど、やっぱり劇場、賑わいを残せるっていうためには本当にいろんな設備とかこれまで飯田文化会館になかったものを、例えばオーケストラピットっていうのも飯田文化会館にはないんですね。それができることによってオペラもできる、ミュージカルもできる、多分皆さんの中には市民でつくるミュージカルだとかオペラだとかそういうことも夢に思っていらっしゃる方いらっしゃるかもしれない。そのオーケストラピットっていうのがあるんです。それは、オーケストラピットを舞台面まで上げると舞台を拡張して広く使えることもできる。いろんな考え方っていうのが劇場の実際設計に入るといろんなことが想像できると思うんですけども、本当に捨てるというのはなかなか難しいと思いますけれども、やっぱり一番の目的、その次の目的って順番にその目的をプライオリティを出していったって、その中で絞っていくっていうのが必要なかなっていうふうに思います。

○佐々木委員 はい、ありがとうございました。

草加さんにちょっと1点お伺いしたいんですけども、今のご発言の中で多目的・主目的、あるいは専門性という考え方があると思うんですけども、その目的の絞り方とそれからホールの規模の相関関係、すなわち目的を絞ったら規模はどうなっていくのかとか、多目的になったらホールの規模っていうのはおのずと上がるものなのか、必ずしもそうとは言えないのか、ちょっとその辺りに関してご教示いただけますでしょうか。

○草加講師 必ずしも専門性を持つことと客席数っていうのとは相関関係はないと思います。必ずしもですね。大きな客席数を持たないと有名なカンパニーは来ない、というふうなことを言われる方もいらっしゃるんですけども、程度がありますけれどね。2,000席と1,500席で1,500席だったら来ないけど、2,000席だったら来るっていうように定量的に必ずしも分けられるものではないです。もちろん旅公演として来るか、それとも自主事業として買い取るかによって変わってくる。極論すると、劇団四季のミュージカルっていうのは、買えば800席ぐらいのホールでも来てくれます。買うんですね。主催事業として。ただし、旅公演で800席の劇場で手打ちで公演をすることは劇団四季はないです。そこが違うってことです。

普通、劇団四季さんの1,300くらい、浅利さんが生きている時代には「1,300席が一番いい」と言っていました。愛知の芸術劇場でも、あのホールで1,300で売り止めて公演をやっていたぐらいですから、うちのミュージカルは1,300ぐらいじゃないとクオリティが保たないということで1,300で売り止めたこともあるぐらい。今だったらひょっとしたら売っているかもしれないですけど、経営が変わると。

必ずしも客席数と専門性っていうことはリンクはしないかもしれませんが。ただし、今、言っているように1,500と2,000とか800と1,300っていうのだったらどちらになるかっていう幅があるということだと思えます。もちろん500席と2,000席とは大きく違うので、それくらいになってくると差が出てくるかも、あり得ないっていう話が出てくるかもしれませんが、1,500と2,000、あるいは800と1,300、その辺には大きな差はない。ただし、東京・名古屋を生かしていきたい、それからオーケストラを呼びたいってなってくると、もうちょっと大きくないとキャパ的にはペイはしにくいんですね。ただ、買えば名フィルさんが1,300だったら来てくれるかもしれないし、1,000席だったらどうですかって、その辺のボーダーになってくるだろうと思います。買えば来てくれるだろうというふうに思います。1,000席でも来てくれるだろうというふうに思います。

勝手に言っているんで、山元さんに本当に聞かなきゃいけないかもしれませんが。

○佐々木委員 はい、どうもありがとうございます。

それでは小澤さん、専門性、あるいは多機能といった視点から飯田のホールのあるべき姿に関してお願いいたします。

○小澤委員 専門性・多機能、これはすごく難しいですね。本当に草加さんがおっしゃっていたとおりのことだと思います。

ただ、カンパニーさんは、劇場のキャパとかスペックを見て自分たちの主催公演、僕たちは手打ちっていうんですけど、手打ちをしてくれるかどうかっていうのは建物を見てないことが多いですよ。どちらかというと、まち・規模とそこにファン層がどれだけいるかっていうところをまずみているのではとみている。要はお客さんがどれだけ来てくれるか、どれだけスペックがいい劇場でもお客さんがいなかったらやっぱりさすがに行けないよ。けど日本国内にいい劇場がいっぱいあるので、そこは行かないっていうことはやはりそこにお客さんが育ってないからっていうところが大きいような気はいたします。

その上で、専門性とか機能というところですが、多目的ホールも無目的ホールみたいなことも昔よく言われましたけれども、最近は多目的でもかなりスペック高いですよ。音楽ホールとしても十分使えますので、逆にコンサート専用ホールを造ってしまうことが、あまり山元さんの前で言うのもどうかもしれませんが、コンサートだけのホールを造ると、やっぱりその後の使用頻度とかを考えると、なかなか苦しなってくるんですけども、多目的ホールで響きのいいホールっていうのはホールが造れるようになってきましたので、そういったようなところがあるかなと。と演劇とか人形劇で使いたいときに問題になってくるのは、

今度は響きの残響の問題が出てくるわけですね。演劇とかはデッドのほうがいいですから、そこは幕をつくるとか使うとかの工夫をしているところも多くありますね。

やはり 1,300、2,000 の劇場と小っちゃい劇場の何が違うかというところ、演出とかお客さんとの距離感が意識されますので、より大きいホールと小さいホールを造るとかっていうところはそこはやっぱりどうしても必要が、いろいろなものをしようとするとそうなると思います。

そこはやっぱり最先端技術での工夫というところも、かなり草加さんに相談しながら、どこまでやっていけるかというところだと思いますけれども、もう一つの創造と鑑賞というところだと、そこはやっぱりそのところやっぱり私の場合は劇場の運営者になりますので、すごく大事なところ。創造と聞いたときに、事業を考えているわけではなく、自主事業、公演だけを考えているのではなくて、やっぱり貸し館事業というのは公共ホールにとっては最大の役割ですので、市民の皆様、利用者の皆様がその劇場を使って、どんどん創造をつくってくださるって環境をいかに支えていくかっていうことも大事。これが一番量としては多いと思います。加えて自主事業で、そこでそのまちならではの作品をつくって発信していくということも大事だな。なので創造っていうだけでも役割っていうのは多くあります。

鑑賞もいっぱいあるんですけども、公演事業だけをやっていくだけではなくて、最近はやっぱりアウトリーチとワークショップってところの役割も大きく出てきますので、やはり事業というものは20~30年前の公共ホールと今の公共ホールでは全然役割の量が違う。仕事の量が違うとよく言われておりますので、なので、最近の公共ホールで活動しているところよりスタッフ数は、職員数がやっぱり多くいるというのは、それだけ事業の幅が広がるというところがございます。

ここの創造と鑑賞っていうところ、本当に僕も運営者としていつも気にしているですけども、やはり舞台に立つ市民と客席に座る市民、両方私たちからすれば大事な利用者さんだし市民なんですよね。舞台に上がる人だけを見てやってしまうと、それはそれで客席に座る市民というのは不満足になってしまいます。逆もそうです。ただ、上田の場合は、やはり客席に座る市民ってというのがまだまだ少なかったんで、やはりそこを今、増やしていかないと、客席に座る市民というのは頑張って増やしていかないと、その後、鑑賞というのは充実していかないですし、先ほどおっしゃっていたサステイナブルという持続可能な施設の運営っていったところでも、やはり利用者さんを増やしていくのと観客を増やしていくというのは本当に車の両輪として大切だなあというふうに思っております。ここのバランスがどうかっていうのは、そのホールさんがどこまで事業をやっていくかというところも関わってくるので、これが正解だというのはないんですけども、両輪だっていうところは常に私は思って運営しております。

私からは以上です。

○佐々木委員 はい、ありがとうございます。

お二方とも比較的、多目的、あるいは主目的と複数の機能というものを持たせるということは、いわゆる建築技術的にも可能になってきているというご指摘だったかと思います。

また、今、小澤さんからは、最初の戦略的というか人をつくるという、劇場で演じるだけではなくて、まさに市民の方々を巻き込んで、それも舞台上にも巻き込み、客席上にも巻き込みながらつくっていくというようなご意見だったかと思います。

では、それを受けて、先ほど塩澤さんおっしゃった飯田にふさわしい、飯田らしい、あるいはオンリーワンというところにも絡んできたときに、じゃあその主目的であるとか、そういうものを飯田の人々はどう捉えるんだろうかというような辺り、あるいはすごく専門性のあるホールにしていく、その場合のものはなんなのかっていう辺りに関して、かなり難しい質問かもしれないけれど、ですけれどもご意見をいただけますでしょうか。

○委員長 私自身が一番迷っているというところ、それから委員の皆さんも多分迷ってられる方が多いんじゃないかなと思うんですが、どういう目的で文化会館を使うのか、あるいはホールを使うのか。そこがまだまだ見えてこない部分があるかなっていう気がするんですね。先ほど主目的・多目的っていったときに、「キャパ数は関係ないよ」っていうお話がありましたけれども、ああ、そうなんだっていうふうに思いましたし、今の文化会館で例えば何かをしようとしたときに、不満になっているところはなんとか解消していかなきゃいけないだろうなっていうことをまず思います。例えば、バックヤードがないぞとか、それからトイレが地下っていうのは使いづらいぞとか、そういうところは解消していかなきゃいかんだろうなっていうことをまず思います。それは多目的・主目的に関係なく、文化会館が持っている性質として必要なところがあるだろうなと思います。

それから、全く視点が変わっちゃうかもしれないんですが、鑑賞者って言ったときに、外から呼んできた興行に対して集まってくれる鑑賞の方と、市民の皆さんが文化会館を中心に活動している、その活動した成果を発表した、あるいは中学生、高校生が発表したっていうときに来てくださる方、鑑賞に来てくださる方って多分、同じ方もいらっしゃるけれども、少し層が違うだろうなと思います。そうすると一口に鑑賞って言っても、一つの枠に捉えきれないっていうところもあるような気がするんですね。その辺がすごく困っているというか悩んでいるところです。

それからもう1つは、「ひろば」っていう言葉に含まれるふらっと気楽に来て何か文化会館の周りで、あるいは文化会館の中でときを過ごす、あるいは憩いの場としておしゃべりができるとか、そういうことも多分望まれるだろうなということを感じるんですね。そうするとそれは多機能っていうことになるのかもしれませんが、その辺を私たち検討をする中でなんとか共通にしていきたい。「こういうことは必要だよ」、「じゃあこれは大事だけど、ちょっと今回は置いておこうか」っていうそういう選択も生まれちゃうかもしれないんですが、でもそういうことをやっていかなくちやいかんだろうなと思います。

すみません、悩みばっかで。

○佐々木委員 いえいえ、どうもありがとうございます。

これまでは、比較的ホールそのものの機能というところに絞ったご意見が出ていたんですけども、まさに今、塩澤さんから、そこに集まってくる人たちというのは必ずしもホールの中だけで活動するわけではなくて、「ひろば」という概念をここで捉えると、要はそこが周辺にまで影響を及ぼしながら、そこでどんな人々の活動が生まれるのかという、まさに次回の委員会での活動の内容というテーマで、今、非常に悩まれていた部分の議論がなされているということになるのかと思います。

すみません、あっという間に時間が過ぎてしまいまして、実はもう既に超過をしてしまっているのですが、もし皆さんよろしければ最後、草加さんに今の議論を受けた形で、この専門性・多機能という辺りに関してご意見をお伺いして、最後ちょっと私のほうでまとめて、それから質問の時間もつくって大丈夫ですか。

それでは最後、またその後ちょっと質問の時間も取らせていただきますので、少々時間を延長してしまいますけれども、ご容赦ください。

それでは草加さん、今の専門性・多機能という辺りに関してご意見をお願いできますでしょうか。

○草加講師 はい、施設として1つ造るということになったときに、それが専門的施設というのはどうかというふうに思います。

ただし、ホールが1つだけしか造られないんじゃなく、ひょっとすると大と中とか、大と小とか造られるときに、専門性を持つ小ホールを造るっていう選択肢はあるかもしれません。

ということで、私がいくつか全部は入らないよっていうふうに機能を説明したときに、少なくともそのオペラ・ミュージカル・ロック・クラシックコンサートぐらいは同じような箱で入る。クラシック音楽とロックコンサートを同じ箱に入れても困らない程度の建築技術は十分あります。ただし、能だとか歌舞伎とオペラっていうのは、同じ箱の中ではなかなか共存しにくい、どちらかにしわが寄ると思います。そこは分けなきゃいけない。

それから能みたいなことになってくると、それは2,000席のホールを造って能はないでしょうと思うし、2,000席のホールを造って室内楽はないでしょうとかいうことになってくるので、そうしたらそれはホールを分けざるを得ないというふうに思います。2つ、あるいは3つっていうふうになっていく、その選択肢はあると思うんですけども、ある程度重心を持った多機能ホールを造っていくというのが重要なポイントだろうというふうに思います。で、その中にはできないものもあるんですね。そこを補うのが、ひょっとするとリニアの時間距離かもしれないというふうに思います。

それから、創造か鑑賞かっていって、極端なことを言うと両方なんですね。片方でいいっていうわけでは絶対ないと思います。本質的に劇場っていうのはものをつくるどころ、作品をつくるどころであるべきで、ママさんコーラスであろうと、バレエの発表会であろうと、

どこかで作品をつくっているんですね。発表しているのが市民会館だっていうだけで、作品をつくるプロセスはどこかでやられているんです。それは公民館かもしれないし。ですので、本質的につくるっていう作業は劇場にとっては不可避なものだと思います。

それからつくることを通してしか職員は鍛えられません。ただ、買い物をするしかできないじゃなくて、作品をつくるというプロセスに劇場のスタッフに関わらない限り成長しない、鍛えられない、ということからいうと、つくるという行為は重要です。ただし、観客も育てなきゃいけないので、創客という言葉を使う人もいるんですけれども、客をつくっていく、観に来てくれるライフスタイルをつくっていかないと、いくらいいものをやってもお客が来ないっていうのは、これぐらい寂しいものはないので、これはぜひやっていただきたいというふうに思います。

それから、「ひろば」っていう言葉、僕すごくいい言葉だと思って、佐々木先生もご存じかもしれないけど、遊園地と広場って青木 淳っていう建築家が書いているんですけれども、どこが違うかって、広場っていうのはそこへ行って遊び方を考えるところで、遊園地っていうのは行ったら遊び方をプログラムされているところだっていうふうにいつている。広場は考えるところなんですね。そこへ行って何をやるかって、っていうことで「ひろば」っていう言葉が使われていますけれども、それを機能として捉えるか、それともスペースとして捉えるか。また、これも議論があるところだと思います。

ただ、「ひろば」は、僕は可能性があるクリエイティブな最もクリエイティブなスペースのことを広場というふうに言う。「それは劇場にとってはふさわしい言葉だというふうに思っ
て我々も広場をつくるんだと。文化の広場をつくるんだ」っていうことを今、岡山では言い
続けているというところですよ。「そこにたくさんの人が集まってほしい」というふうに言っ
てます。ですので、劇場は劇場をつくる人、あるいは行政だけでつくるのではなくて、市民
と最終的にはつくるものだと。それはお客になってくれないと劇場にならないので、一緒
につくっていききたいというふうに思っているというところですよ。

○佐々木委員 どうもありがとうございました。

非常に多くの示唆に富んだご発言があつて、なかなかもう既に時間が延長を含めて切っ
てしまっているのですが、皆さん本当にいろいろ質問があると思います。ですので、どうでし
ょう2件ぐらいに制限をさせていただいた中で、質問を受けさせていただいて、今日足りな
い分は次回の委員会でもたどんどんご発言していただくというふうにさせていただきたい
と思いますけれども、ご質問のある方いらっしゃったら挙手をお願いしますでしょうか。

(発言する者なし)

○佐々木委員 しばらくいろいろ消化吸收するのに時間がかかって、一度考えてみるとまたいろ
ろと聞きたいことが出てくるということかと思えますけれども、もしじゃあ現時点で質問が
ないようであれば、ちょっと簡単にまとめさせていただいて、終わらせていただきたいと思
います。

私自身も今日、進行役をさせていただきましたけれども、大変勉強になりましたし、いろんな世界も見えてきて、ワクワクする非常に貴重な時間でした。

いくつか印象に残ったことを挙げさせていただきます。1つは戦略的利用ということで、リニアが来る時代にまさに飯田市として、あるいはもっと広域として、まちをつくる、賑わいをつくる、人をつくる、いったいその劇場というものに施設以上の役割をどういうふうにしたかというのかというのがまず1つ非常に大きいポイントだなというふうに思いました。

それからあと非常に貴重なご発言として、時間距離の短縮というのを単なる人を呼ぶための手段として捉えるのはなくて、例えば創造とか鑑賞とか、あるいはもっと劇場の創作活動というのは広く捉えた上で、どのようにそれをアドバンテージとして使いながら、この新文化会館に利用していくのかという視点、これは今まであまり議論されてこなかった視点かなというふうに思ひまして、非常に貴重な示唆をいただいたというふうに思っております。

それから3点目に関しては、2軸の中での捉え方としては、基本的には左寄りの地域、比較的小さな飯田の周辺エリアというもので捉えながら、この建設技術、設計技術等も使いながら主目的、複数の機能を持たせるということは可能であろうというようなこと。それからもう1つは、その中でもし複数のホールを造るのであれば、専門性の非常に高い少し規模の小さいものを追加するというような考え方もあるということ。で、それでも造りきれない場合には、2番目のポイントであった時間距離の短縮というものを活用し、より広い範囲でそのホールというのを捉えていくというような視点が提示されたかなというふうに思いました。

時間を超過してしまいましたけれども、皆さんの非常に示唆に富むご発言で大変有意義な時間を私自身過ごさせていただきました。

本日は長時間にわたりましたけれども、まさに皆さんの新文化会館への思いを伝えるような勉強会になったのではないかというふうに思います。

それではよろしいですか。以上で。

それではこのディスカッションのほう、以上で終了したいと思います。皆さんどうもご静聴ありがとうございました。

(拍手)

○委員長 佐々木先生ありがとうございました。

この場から進行をさせていただきます。

本日予定されておりました議事は以上となります。

委員の皆さんには、あるいは傍聴に来てくださった皆さんには、ご協力いただきありがとうございました。

委員の皆さん、次回以降もまた積極的にまた発言して、論を交わらせていきたいなというふうに思っています。今、まとめていただきましたけれども、引き続き新飯田文化会館というところに関心を持っていただいて、新しい文化会館に向けた検討に様々な立場関わって

いただき支えていただきたいというふうに思います。

ありがとうございました。

3 事務連絡

○委員長 それでは最後に事務連絡を事務局からお願いします。

○事務局 本日はありがとうございました。

本日の委員会、今後の進め方に関しまして、委員の皆さんから毎回ご意見、アンケートでいただいております。メールでの提出も大歓迎でございますので、委員の皆さんはアンケート、メール等でご提出いただければと思います。

なお、次回の第5回の整備検討委員会ですけれども、最初の資料で予告をさせていただいておりますけれども、年を明けまして少し間が空いてしまいますけれども、2月3日の金曜日を予定しております。この週は、NHKの「のど自慢」が予定されておりますので、文化会館もちょっと準備がありまして、会場を市の公民館・ムトスぷらざの多目的ホールで開催したいと考えております。改めてご連絡を差し上げますので、委員の皆様にはご出席をお願いしたいと思います。

以上です。

○委員長 はい、次回はムトスぷらざということですので、よろしく願いいたします。

4 閉会

○委員長 それでは、以上で第4回飯田市新文化会館整備検討委員会を閉会とさせていただきます。

お疲れ様でした。ありがとうございました。

閉会 午後 9時18分